

仲間と追うへボの魅力

お話を聞きした日：令和5年1月18日

話し手：早川利廣さん

聞き手：中島菜々子、志津晴巳

書き起こし：中島菜々子

プロフィール

早川利廣です。73歳です。

建具職です。もうね、自営業になってから50年近くになるかな。仕事も本当はやらんでもいいわけやけど、職人はそういうわけにいかん。頼まれりやするという。体がまめなら仕事はできんことはない。

クロスズメバチ(ブラックビー)から名前をつけた付知ブラックビークラブを最初の会長が20年近くやったもんで交代ということでもう10年近く会長職をやっとる。へボは親の姿を見ながら自分も飼うようになって。そうやな、30年ぐらいになるかな。

へボとは？

黒白のハチやね。黒地に白い縞があって、体長1センチちょっと位。

アリと一緒に女王様中心で女系やでね。働きバチも全部メスで、オスはほんとに子孫を残すだけの餌食い虫やわ。ミツバチと同じで、オスは働かんね。繭からかえってすぐの若いハチは外へは飛び出さんで。まず巢の掃除とか給仕係。寿命は1カ月くらいしかないもんで給仕係が2週間くらい過ぎると初めて外へ行って、肉食やもんで昆虫が昆虫を取ってくるわけやね。

沖繩から北海道までクロスズメバチはいるけど食べる文化は東海地方でもこの辺だけやね。長野県の一部と、串原、付知、加子母。豊田方面でも稲武の方は食べてますね。山間地のたんぼく源として、結構前から食べとったんじゃないかな？ 結局、山の中の人はそういうもんでタンパク源を補給したんや。

育てる文化の始まり

小さい頃は芝刈りに行ったり、山の手入れ行ったりしたときにへボの巣があったからとか、田んぼの畔とかに草刈とつたら出てきたから取って食べるとかその程度やったと思うよ。箱に入れて大きくして食べるうちゅうのは30〜40年前くらいからじゃないかな。串原でそういう風に普及活動が始まってから。

昔はそんな大きい巣になった記憶はないよ。せいぜい1キロちよつとくらいの巣しかならなんだ。箱も一斗缶に入れたりさ、いろんな飼い方をしとったわけ。今はもう専門にへボの箱を工夫



して作って山へ持ってく。僕、職業柄ね、器用に箱を作るということで結構頼まれて作りますよ。

巣を大きく育てるのに適したハチ

クロスズメバチには里に巣くうやつと、山に巣くうやつと。クロスズメバチのなかでも種族があるわけやね。田んぼの畔にある巣は、僕んたはピンコロって言ってそれは箱に入れては飼わんわねえ。大きくならんし、アシナガバチと一緒に9月の終わりぐらいになると大体営巣を終了しちゃうもんで。山から捕ってきて大きくするシダクロスズメバチは、大体11月までは営巣をやるもんで。もう飛び方が違うわけよ。高いところを飛んでストンと巣に落ちる。そのピンコロってやつは本当に草をくぐって歩くくらいにして巣のそば行ってもこうジグザグに巣に入る。

ハチ追い

へぼに餌を持たせるわけよ。綿で印をつけて飛ばすわけ。それを目印に見えるところまで見えるところまでと順々に追っていったわけやね。追っていても戻ってくるところは最初のところやもんで。最初のところは餌を付ける専門。追っていく人は、順番に巣の方へ行く。

昔は走って、ぼったけどね、今は走らん。「おい行ったぞー」ってやつとったけど、今はもうトランシーバーや。トランシーバーで順番に、尺取りのように延ばす。ほぼおんなじコースを通るもんで。「行ったよ」って、トランシーバーでしゃべって、ずっと行って、「もうそろそろ見えるころやぞ」って言うと、待手が集中して、「あゝ、来た来た」っていうと、ああ見えたんやなって。そのやりとりが面白いわけよー巣を見つけると大喜びで、前ならきっそく缶ビールで乾杯(笑)！

巣は基本土の中やね。地蜂っていうくらいやし。かける場所は大体特定の場所やね。かけんところはいくら良いところでもかけてないし、こんなところ!?!ってところも毎年かけるし。でもやっぱ雑木林のあるところの方がかけやすいね。杉林や松林にもかけとるけどその近くには雑木林がやっぱりある。それと、ようしたもんで秋になったら明るくなるころを選ぶね。どういうところぞそれを見分けるが知らんが。

越冬するハチ

越冬は女王だけやね。交尾するとすぐ越冬にかかるわけや。大体4月くらいにはみ出してきて体力をつけながら自分で巣を探すわけやね。1カ月くらいかかって良い巣の場所を見つけて



最初は女王だけでちょうごの湯飲み(野球ボール大)ぐらいまで育てるわけ。11羽働きバチができる、もう女王は外に出ないという研究結果もあるみたい。

飼う巣の数と目方

僕は今のところ11箱育てています。欲しい人に売るだけで、だいたいが自分で食うぶんを飼って楽しむ。飼うとると「もう少しかえよ。」って言われるもんで、じゃあ飼ってみるわって言って。だんだんだんだん巣の数が増えていっただけで自分で食う分やったら、3つか4つ飼えば充分足りる。ただ、途中でつぶれてまうやつもあるもんで全部が全部5、6キロになるわけやないでだんだん数を飼う。数の割には目方が無い。6キロの巣は、13から15段ぐらい。

巣が大きく育ちやすい環境

山で見つけてきて、最初は里で飼っておった。けどやっぱり温度が高いのか条件が悪いもんで、今は山に小屋を作って飼ってるんです。民家からちよつと離れたところやけど。

へボの育て方

最初の方の餌は鳥の心臓とか肝とか胸肉。あるいは鱒とか魚の肉やね。最終的に僕は豚のヒレ肉を毎日。販売するときに、「お前のところでもらったへボは肝臭いぞ。」って言われちゃうので。鳥肝とか魚は取り上げる寸前にはもう切っちゃいます。ハチは肝をずうつと喜んで食べるし、関係なく最後まで餌として与える人もあるけど。

最初は鳥の心臓4分の1からはじめて、それを一個ペロリと食べるようになったらどんどん食わしてくわけ。砂糖水も最初からずっとやっていくわけやけど、砂糖水は巣の材料にも使うみたいで毎日2キロ。それくらい砂糖は飲ませ、毎日肝1キロ、心臓1キロ。すごい金額やで。砂糖ははじめは1キロの袋で1カ月くらい持つけどね。10月になると、大体1つの巣で1リットルくらいの砂糖水はペロリと舐めちゃう。それが11個もあるとえらいことになるわけや。餌もヒレ肉一本じゃ足らんもんでさ。取り上げる寸前になると、とにかくまいもんを食わせてもう餌代関係なしよ。餌が足らんと子を持ちだしちゃうもんで。それをやせんよう餌が余るように余るように。

コンテストがあるようになってから、餌代おかないな



しに。しかも、それを分けて欲しいという人ができて、さらに餌を厳選して。

自然の中のへボの餌

セミの死骸はきれいに羽まで食いますよ。カマキリとか、目の色変えて食べるに。昆虫のくせに昆虫を食う(笑)。自分で運べる量を肉だんごにして持ってく。せっせか、せっせかと、そこが無くならまで通うで。

クモでも小さいクモね、ぶ〜ん、と行くと逃げてシユーと落ちるやろ。それをパクっと。そういうやりとり見たことあるよ。あの大きいシマシマのクモには行かんわね。負けちゃう。あれも死んで落ちとりゃ絶対食うと思うよ。

大学の研究者がへぼの臓物を調べるわけよ。いろんなもの食っとるで。ネズミまで食っとる。

田畑の虫もへボの餌

野菜の虫、青虫のようなやつ。あれは簡単に噛みついて、持ってく。田んぼも無消毒。植えるときに苗に殺虫剤や殺菌材が入っただけで散布は一切しない。こころ軒くらいは虫おらん。ガガンボはおるに。ああいうでかいものはおるけど。あれでも死骸になりゃ絶対たべると思うよ。草刈りやるというんな昆虫が死ぬら。へぼが来とる。

害虫やって言うけど、刺されるで害虫だけで、あれは益虫やと思うとる。やつぱり害になる昆虫を相当数食っと思うよ。刺されてさ、病院行かんもんで、害虫扱いやけどよ。

食べ方は佃煮に

ピンセットで抜いてね。1時間で1人500グラムくらいしか抜けん。巢の1枚半くらいやよ。食べ方は、僕は大体佃煮やね。その佃煮でまぜご飯をつくってもらうわけや。

昔は、へぼで味御飯を炊いたんやけど、味が薄くなるし見てくれが悪いもんで、佃煮を、まぜご飯やちらし寿司にいっしょに混ぜたり、朴葉寿司で食べたりもするし。

今、喜ぶ人は少ない。わ、めずらしいな、ってて食べるのはお年寄りだけやで。若い人には大体敬遠されるわ。



山の自然のへボと飼ったへボと味比べ

山のへボは昆虫食しとるわけ。昆虫食で育った幼虫の方が絶対うまい。どんなええ肉食わしたって、野のへボには勝てん。コオロギのような昆虫をエサにすれば山(のへボ)に負けん味になるけど。さ〜ま〜でやるかって言やあ、てっつりばやく肉を買ってきたり、魚買ってきたり。

刺される

昔は煙幕で気絶させて取っとったけど今は防護服があるもんで生掘りですわ。だから気を付けようって言ったって、1年に10回どころじゃない刺されるで。山で刺され、世話しにいつて刺される。まあ、アナフィラキシーは気をつけないかんけど。串原のへボの巢の大きさを競う大会なんかは日本一危険なお祭りって毎回救急車が来とったもん。まああそこは温泉もあるし、キャンプ場みたいなのも道の駅もあるしで人が多いのにへボでブンブンやで。煙幕かけてもやっぱりすぐよみがえってくるもんで。攻撃するやつは攻撃するわね。そこから危険やで。まあなるだけ刺されないようにいつていつても、油断するとちゃんと刺される。アツハツハ。



へボの数は年によって

年柄やね。去年は春先には山にもものすごい多かったけど、秋にはまったく少なかったで。越冬どんだけして、その越冬したやつがどんだけ巢が作れたかというのは、春先の温度とか、雨によると思うよ。そりゃ土の中に産み付けて入とるやつちゃもんで、雨水が入りゃ巢が水浸しになりやそれで終わりやしね。

へボとりに遠征

去年は山にたくさんあったから今年はどうかと言うと、全然無いときもある。そういう時は遠征するわけよ、津具とか、稲武とかさ、あっちの方へ。長野県の方へもわざわざ捕りに行くわけよ。

付知の山はフリー!?

付知の個人の山はどこの人が来たってフリーやね。キノコ採りもそうやよ。全然フリーやに。

自分とこの山の出る場所知らにゃ、行っても空振りやで。それよりも、知とる人のとこへ足しげくいって採ってくる。

持ち主の人に、「おい、お前んとこの山のやつやよ、ってやったりしてさ。たまに綱張とる人もあったけど。いまは無いね。

付知ブラックビークラブのはじまり

平成のはじめだったと思いますよ。その前も串原の大会へは箱で飼ったやつを持ってつったんよ。串原ではここ数年前までは常勝軍団やった。よそのクラブの会場荒らし(笑)。結構ラジオ番組とかテレビとかが取材に来ましたよ。

へボとりの先進地は串原だったのでね。串原にならって地元でも大会をやるとういうことで付知にへボのクラブができました。串原へみんな車で研修というか、技を盗みに行くんやね。最



初は10人くらいから始まってどんどん途中までは増えてって、また減ってって、今また32〜33人に増えてという状況ですけれど。市のがんばるサポート事業の補助金をいただきながらさらに人数を増やしたり。

若い人は、僕の子どもくらいやもんで50歳くらいかな。その人が一番若いかな。

あと、苗木とか坂本で入った人はちょうど60歳くらいかな。みんなそれより上ばっかやわ。

クラブには付知に限らずよその町の方も入ってますよ。地元で飼ってみえます。坂本とかね落合とか。あるいは七宗とか、美濃市の方でもクラブに入ってみえて飼ってますよ。町内だけのメンバーじゃないというね。

コロナがまだ始まる前は付知でも付知峡の温泉で一間かりで、懇親会をやったよ。クラブでハチ追い会をやった。まだ巢に入れてない人はそこで欲しい人はもらって行けよっていう。20人くらい来たかな。美濃市からも飛んでこぎったで。

全国の愛好家たちとつながる

へボコンテストの時はへボの入った朴葉寿司を昼食に出して、一杯飲んだり、飯食ったりしてよもやま話に花を咲かせて。最近は何でコロナで集まれとらんのよ。

全国地蜂連合会というクラブもあって、長野県の駒ヶ岳、あるいは御岳の大滝村の方へ泊りがけで体験ツアーを3年組んだるけどコロナでいっぺんも成功しとらんのよ。ハチ追い体験して、あとは宴会して温泉に入りましょうという企画。

全国地蜂連合会はだいたいこの東海圏内やね。その会も増えたり減ったりしてますけどね。高齢化しとるところがまあネックやけど。中には若い人が入ってきたり、他県からもどうしたらそんな大きい巢ができる?」というところで訪ねてくるわけ。付知は大きいのが多いよね、7キロ超しくらいがマックスですけど。

コンテスト

もう今はねえ7キロいかんとなかなか優勝できないね。これは6キロだ。4年前やね。この時の優勝はまぐれやったな。(笑)ここ3年くらいは付知でもコロナで大会ができませんんでオンラインで、会場会場ではないでコンテストをやってます。やっぱり大会をやるとき、地区外からも参加して色んな話が聞けたり交流の場になるわけやもんで。

へボで海外ともつながる

ここ数年前やと、アフリカから昆虫食文化を見学しに来たこともあ



りました。それを紹介してくれるのが立教大学の野中教授。まったく付知に憧れた人で。アメリカからも来ましたよ。オランダで世界サミットをやったこともあります。そしたら申原が持つたへボは大人気やったそうです。

中国の雲南省は日本よりはるかに進んできて完全養殖やっとなる。ハチの種類はちょっと違ってあんまり攻撃的なハチじゃないみたいやけど。この辺のへボよりはちょっと大きい種の良い女王を取って、小さい部屋で働き蜂ができるまで育てて、それをお百姓さんに配給して。

昆虫食が注目されるが

人口が増えて食料難になったときには、安価な餌でタンパク質が取れるのが昆虫食らしいけど、へボは安価やない。一番いいのは、コオロギがやね。草とか残飯で育つということやもんで。

へボはそんなわけにはいかん。山へ入って、自然のやつを取ってくればその労力だけやけど、それじゃ1日で何キロも取れんで。去年も山に取りに行ったけど、12、13個掘り起こして、1キロちょっと取れただけやで。それも1人やないでね。3人くらい行って、とつても日当の出るようなもんじゃない。僕んたあは面白いで行くだけやでせ。

なかなかへボっていうのは生業にはならんよ。全くの趣味の領域で。ヨーロッパあたりではコオロギとか昆虫食でもう商品化されとるけど、へボは他のそういうものと違って餌代がかかりすぎて効率の悪い昆虫食なわけやわね。ただ栄養価は高いと思う。

仲間とのハチ追いは本当に楽しい！

6月の終わりから11月までずっと半年近く昆虫と格闘しながら触れ合う、そういう面白さがあって。そんなに金をかけずに1日中、朝から晩まで、5、6人くらいのメンバーでハチ追いをして山を飛び回れる。まず、エサに乗せて、そこから追いはじめて、捕るという工程が、本当に面白いな、魚釣りなんかより面白い！

それとやっぱ自然の中で、弁当食ってもうまいしき。一杯飲むときなんか、大風呂敷広げてしゃべるもんで、ききりに面白い(笑)。非日常が楽しいわけやもんで。

とにかく半年間はそうやって楽しく過ごせるという。友達と山で遊んで、自分とこも飼って、大ききを競い合っつていうのはね、なかなか面白いですよ。

今度、愛知県瀬戸市から2人ばかり入会しそうやわ。こつちのへボは大きくなるみたいやで、仲間にくれて。その人も退職してみえるで65歳くらい2人連れで。

会員はどんだけでも増やしたい、若い人増やしたいけど、なかなか若い人は食いついてこんのよ。こういう面白い遊びは体験してみんとわからんもんでぜひ体験してほしいね。

